

交流紙 <農>の心 <暮らし>のきずな

第4号 (その3) (2012年4月7日発行)

(その3) お米の自然栽培農家を訪ねて

宮城県加美町 自然楽農園 長沼さん
「奇跡のリンゴ」の木村さんに学びながら
自然栽培のさまざまな工夫 …

「自然栽培」というのは何なのか? とくにわかりづらいのが「無施肥」である。化学肥料は無論のこと有機肥料も使わないというのである。そんなことをすれば土地がやせ細って収穫できないのではないか?! おいしいお米などできるのか?!

3月28日の午後に訪ねた時、長沼さんに私は、お米を食べた感触を伝えてみた。

「佐々木さんが送ってくれるいろいろなお米を食べ比べてみましたが、自然栽培米は食味が素朴でゆっくり噛んでほのかに甘みとうまみが出てきます。そういう意味で食味のインパクトはそれほどないが、2、3日たつともう一度食べたいと胸のあたりが欲してくる。口ではなくて」と。

長沼さんは「ここに積んであるお米みんな持って行け」とおどけながら、私が自然栽培米の真の良さを理解していると喜んでくれた。そしてやおら2つの瓶を取り出し、ちょうど1年前の3月初旬に炊いたご飯に水を足したものを見せてくれた。



写真左が自然栽培米、右が有機栽培米。左の方が透明で、右はご飯が部分的に黒ずんでいる。

自然栽培米の純正さがわかる。有機肥料といえども生ゴミや堆肥の中に人工物質が含まれている場合が多い。そして、それ以上に土地を深く丁寧に耕してやれば肥料に頼らずとも土それ自身の力を発揮してくるのだという。

だから逆にそれまで化学肥料などに依存する普通の栽培(慣行栽培)をしていると、自然栽培に移行しても4年くらいは反当り1,2俵という低収量になってしまうのだ。そこに自然栽培への移行の難しさがある。来てくれた、長沼さんの仲間の伊藤さんが「そうなんだ」と体験を話してくれた。



写真右から、伊藤さん、長沼さん、岩崎、鹿野さん。(佐々木さん撮影)

伊藤さんは「長沼さんが除草機を考案してくれてみんなが助かっている。除草剤を使わずにすむからね」と言う。



写真は太細2種のチェーンを使った除草機である。

(帰宅後「農業共済新聞」2009年7月の記事より引用。左、長沼さん運転中)

ちょうど今は種籾を水に浸す「浸種」の作業中であつた。一番下にかごに入ったメダカがたくさん泳いでいた。上からちょろちょろと流れる水が

安全なことを見えるようにしているのだという。いろいろ工夫しながら趣向を楽しんでおられる。

10 日前の 18 日には木村さんを加美町にお呼びして長沼さんのお世話で勉強会を開いた。佐々木さんと鹿野さんは発売した「お米ギフト」の自然栽培米パックを



木村さんに贈呈し、「これはいいね～」と言ってもらって嬉しかったとのことである。(その時の写真)



登米市南方 成澤さん

「地盤修復した田で稲はがんばってくれた」と喜ぶ

翌 29 日の午前、登米の成澤さんを訪ねた。成澤さんは 10ha もの田を自然栽培でやっている。昨年が 6 年目で、草取りも手作業で数回行うという限界に挑戦している。

以前は江井（えねい）兵庫先生（静岡）に師事して「土を深く耕す丁寧に。堆肥と共に深く耕す」ことを教えられ実践した。ある時自然栽培米に関心を持ち、「堆肥を入れないでやってみます」と伝えた。先生は「それはだめだ」と言ったが、お亡くなりになる前「君ならがんばれる」と言って下さった。

その後、木村秋則さんとゆっくり話す機会があり、その時木村先生が「成澤さんは大丈夫だよ」と言った。しかし、なぜ大丈夫なのだろうとずっと分らなかった。長いこと考えて、土をちゃんと耕している、だから収量が落ちたとしてもひどくはない、ということかと気がついた。次にお会い

した時に、そうですか？と尋ねると、そうだ、と言う。その時、成澤さんはとても大きな責任を感じたという。じっさい、収量が極端に落ちると言われる 1~4 年の間、ほとんど落ちなかった。あらためて江井先生の教えのありがたさがわかった。

昨年の地震で田が 7 枚ほど 50cm 斜めに地盤沈下した。これを修復するのに業者に頼めば復旧補助費は 8 割でる。しかし、それでは田が痛むので自分で修復することにした。土をできるだけ元の状態にもどすように注意して。

稲の生育に差が出るのではないかと、ハラハラしながら見守っていたが 6 月まで差が出ない。さすがにつらくなって 7 月には稲に「もういいよ、がんばらなくて」と声をかけた。それでもその後も育ってくれて、けっきょく増収になった。



(成澤さん、奥さんと一緒に。佐々木さん撮影)

増収になった 60 袋のお米は、建物を修繕してくれた大工ボランティアさんや散乱した育苗箱 5000 箱を片付けてくれたボランティアさんに全部送ることにした。「税務申告したら、その分は経費とは認めてくれず、親戚などに送る縁故米あつかいになり、結局かなり赤字が出ました」と笑いながら、「私はわかってくれる人に食べてもらいたいです」と繰り返された。

後継ぎの方にもお会いした。ササングレの浸種の準備をされていた。成澤さんは、2 月に東京であった自然栽培セミナーへの参加の後、ご夫婦で少し長い旅を楽しまれたとのことである。ようやくほっとされたのであろう。

「またいつかお訪ねします」と言ってお別れした。